



Title	アレクサンドル・メーニの思想 : エキュメニズムとその周辺
Author(s)	山下, 丈夫
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 161-170
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アレクサンドル・メーニの思想

エキュメニズムとその周辺*

山下 丈夫**

Ранним утром 9 сентября 1990 года недалеко от собственного дома под Москвой отец Александр Мень был убит неизвестным преступником. Так завершился жизненный путь человека, по масштабу и значимости жизненного дела сопоставимого с великим русским гуманистом Андреем Сахаровым.

С течением времени постепенно становилось ясным, что в основе этого загадочного убийства были особенность существования о. Александра в Русской Православной Церкви (РПЦ) и особенность его мировоззрения. Во-первых, он, выходец из катакомбной Церкви, находился в скрытом конфликте с верхами РПЦ. Во-вторых, он был крещеным евреем и, как таковой, вызывал ненависть у антисемитов и “патриотов”. В-третьих, он был сторонником экуменизма. Таким образом в России, где тесно связаны политика, национальный вопрос и религия, это убийство чревато не только религиозными, но и политическими, социальными и идеологическими проблемами.

Задачей данной статьи является размышление об особенностях мировоззрения о. Александра Менья, поддерживающего экуменизм, и представление одной из страниц духовной жизни современной России, олицетворенной в его жизни и деятельности.

*Мировоззрение протоиерея Александра Менья Экуменизм и круг проблем, связанных с ним (Takeo YAMASHITA)

** 言語文化研究科博士前期課程

Дело таких людей, способствующее обретению человеком подлинных ориентиров в современном мире, возрождению его духовности, может принадлежать не только России но и представлять всеобщий интерес.

1 はじめに

1990年9月9日の早朝、モスクワ郊外の自宅近くでロシア正教会長司祭アレクサンドル・メーニ(1935-90)が何者かに襲われ、殺害された。生涯の活動の社会的影響力においてロシアの偉大なヒューマニスト、アンドレイ・サハロフとも対比される¹⁾メーニの死は、人々に大きなショックと不安を与え、その波紋は国外にも及んだ。この事件の真相については、いまだ犯人が逮捕されていないこともあって謎の部分が少ないが、事件後に書かれた数多くの関連記事や論文は、ロシア正教会におけるメーニの存在の特質と重要性を浮き彫りにしている。

その特質をここで簡単にまとめておくと、まず第1に、メーニはカタコンブ教会²⁾の出身者であり、ロシア正教会上層部との間に根深い不和が存在していたこと³⁾、第2に、彼がユダヤ人であったために、正教会の内外を問わず反ユダヤ主義者、国粋主義者の間で嫌悪感を生んだこと、第3に、彼は、全世界のキリスト教会の統一を唱えるエキュメニズムの支持者であり、民族的思潮の優勢な正教会内部で異分子的な存在であったことである。こうしたメーニの特質を考慮に入れると、今回の事件は、政治と民族と宗教が密接に結びつくロシアにおいては、単に宗教の世界にとどまらず、社会にも大きな問題を投げかけたと言することができる。

本論では、政治、社会、思想等の分野における諸問題が収斂されたこの事件の1つのアспектとしてメーニの思想的な特質であったエキュメニズムの問題をとりあげ、1)エキュメニズム問題の多様性、2)メーニのエキュメニズムの特質、という二つの視点から考察する。

¹⁾Тарасов А., “Почему именно он и почему именно сейчас?,” Русская мысль, 1 февраля 1991.

²⁾ロシア国内には国家によって公認された教会のほかに、非合法で極度に秘密結社的な正教諸派、教会、セクト等が活動している。カタコンブ教会もそうした非公認の教会の1つで、1929年、当時の無神論権力との協調路線をとった府主教セルゲイに反対した聖職者、信者らによって結成された。

³⁾Тарасов А., Там же.

メーニに対する関心は、現代ロシアの人々の社会的問題への問いかけの意識にも通じていると考えるならば、私たちにとってもメーニの思想と存在について考察することの意義は大きいのである。

2 メーニのキリスト教信仰

1935年、モスクワ郊外のユダヤ人家庭に生まれたアレクサンドル・メーニは、宗教弾圧の厳しい時代にもかかわらず信仰熱心な母の影響で宗教教育を受けて育ち、彼の後の述懐によると、12歳の時にはすでに聖職に就く使命を自覚していたという。それからおよそ10年後の58年に輔祭に、その2年後には司祭に叙聖された。

聖職者であり、宗教史家でもあり、また世界文化に通じた優れた学者でもあったアレクサンドル・メーニの活動は多様で実り多きものであったが、それらすべての活動は、一つの偉大な志向——イエス・キリストと教会への奉仕——で貫かれていた。メーニの活動の理念は、20世紀のキリスト教徒にとって手本となるような生活・思考上のモデルを創造することであり⁴⁾ それはまずなによりもロシアにおいて行われるべきであると考えた。

ロシアにおける精神性の復活という難題を自己に課したメーニは、60年代にその活動を開始した。この時代、ロシアにおいてキリスト教は、全体主義に対抗する一大勢力として恐れられていた。国民は国家によって非キリスト教化を迫られ、国内における信仰の火はいまにも消え入りそうな状態にあった。そうした時代に、「種まき人が種をまきに出た」⁵⁾のである。

アレクサンドル・メーニは、自己に課した課題を主にインテリ層の中で実現しようとした。なるほど大勢は無神論思想にあったとはいえ、彼はインテリ層に多くのものを求め得ると思った。創造精神の旺盛なインテリ層はロシアの道徳的、文化的、社会的刷新の源泉の一つになってくれるであろうと信じたからである⁶⁾。精神性の復活なしには社会・文化の再生は不可能であることにインテリ層の目を開かさねばならないと考え、メーニは全身全霊をこの仕事に打ち込んだ。モスク

⁴Белавин А., “Священник Александр Мень”, Памяти протоиерея Александра Меня, Москва, 1991, стр.30.

⁵「聖書」(新共同訳)マタイ13:1-23を参照。

⁶Василенко Л. И., “Культура, церковное служение и святость”, Асқінох Сборник памяти о. Александра Меня, Москва, 1991, стр.167.

ワ郊外およびその他の町における、多数の信徒の参加する神学、聖書、カテキズム研究の非合法グループやサークルの結成、組織化は、その実践の具体的な表れである。

その後、ペレストロイカの始まりとともにメーニは延べ 200 のレクチャーをこなし、数々の公開討論や会見に参加し、また大量の論文を書いた。また、聖職者としてのメーニは教会において、キリストとの合一の中に新しい人生の出発を期待して彼のもとにやってきた人々を、自分の説教を通して神に近づけた。

寛容、率直、脱イデオロギー性、空虚な夢からの覚醒、そして生命と慈愛に満ちたキリストへの信仰——それはキリストの模倣であり、他人への奉仕にその本質はある——、これがメーニの信念であった⁷⁾。

彼は次のように述べている。

「キリスト教の解釈では、我々人間には目的がある。それは自分の原型、創造者に近づくことである。この目的は、神や人々へ愛を向けることによって達成される」⁸⁾。

「愛——これは内面的な体験だけではない。これは変化する力であり、宇宙的意識への道であり、分離状態の終焉である。目的は実践されねばならない」⁹⁾。個人の自覚の芽生え——ペルソナリズム化をメーニは、進化の最も高い段階の一つであると考えた¹⁰⁾。それによって人間は群れから分かれ、群衆意識から離れる¹¹⁾。彼によれば、キリスト教ペルソナリズムの本質は、神が人間に真の尊厳を与え、人間は与えられた能力を生活のすべての場面——個々の活動、家庭、社会、教会において発揮する使命をもつというところにある¹²⁾。メーニの活動を支えたのは、こうした人類の創造力と才能の活性化において大きな意味を付与されたキリスト教ペルソナリズムの精神であった。彼は群衆心理的なもの、民族的・伝統的なものからの自由を強調した。

メーニは説教で語りかける。「近い将来に訪れるであろう神の世界は、もしかす

⁷ Бессмертный-Анзимиров А., “Пастырь Сергиева края”, И было утро, Москва, 1992, стр.335.

⁸ Мень А., “Контакт”, Искусство кино, №7, 1989, стр.43.

⁹ Там же, стр.44.

¹⁰ Там же, стр.41.

¹¹ Еремий А., “Побеждай зло добром”, Знамя, №8, 1992, стр.181-182.

¹² Василенко Л. И., “Творить в Духе и Истине”, Русская мысль, 24 января 1992.

るとすでに今、我々の内部に到来しているのかもしれない」¹³⁾。つまり、隣人への愛、創造者の模倣という人間の目的をそれぞれが意識し、ペルソナリズム化を通して全人類的な精神性の復活が訪れる時、それぞれ人間は、その時、その場で神の世界を感じることが可能なのだと。

後に見るように、このペルソナリズムは、メーニが理想としたエキュメニズムの本質の大部分を占めている。

3 エキュメニズム——理解の多様性

アレクサンドル・メーニの思想を彼のエキュメニズムの特質をとおして考察することが本論の課題であるが、その前にエキュメニズムの一般的な意味と理解の多様性について若干ふれておきたい。

まず、一般に理解されているエキュメニズムについては、次にあげる第2バチカン公会議でのエキュメニズム教令の一節がその本質的な意味をよく説明している。カトリック教会は1962年、教皇ヨハネス23世によって招集されたこの公会議において、その目標の一つとして教会一致を掲げた。

「主キリストによって設立された教会は単一・唯一のものであるが、数多くのキリスト教団がイエス・キリストの真の継承者として人々の前に現われ、皆自分が主の弟子であると公言しながら、あたかもキリスト自身が分裂しているかのように、考えが異なり、異なった道を歩いている。……われわれの分かれた兄弟の間にも、聖霊の恩恵に励まされて、すべてのキリスト者の一致を回復しようとの運動が起こり、日を追って盛んになっている。三位一体の神を奉じ、イエスを主および救い主と認める人々が、エキュメニカル運動と呼ばれる一致運動に参加している」¹⁴⁾。

「啓示された真理の探究において、神に関することを認識し、かつ表明するために、東方教会と西方教会では、それぞれ異なった手段が用いられる。このため、啓示された秘儀のある面が、ときには一方よりも他方によってより適切に理解され、より明らかに説明されるのは不思議ではない。したがって、このような時には、それらの種々の神学的表現形式は、しばしば互いに対立するよりも、むしろ

¹³⁾ Мень А, "Кредо", Русская мысль, 13 сентября 1991.

¹⁴⁾ 公会議解説叢書7「公会議公文書全集」(南山大学監修, 中央出版社, 1969) 203頁

補足し合うと言うべきである」¹⁵⁾。

世界の大宗教のうちキリスト教ほど多数の分派が生まれ、それが政治的、社会的な抗争につながった宗教はないと言える。エキュメニズムは、こうした現在分裂状態にある各教会間の和合をはかり、唯一の聖なる教会を目指すキリスト教の統一運動である。

近代のエキュメニズム精神の高揚のきっかけは、外国への宣教が盛んになった19世紀に、赴いた宣教地で各教会の宣教師がそれぞれの立場で福音を説いたために混乱が起き、キリスト教そのものに対する不信を招いたことにある。その後20世紀に入って、プロテスタント教会のイニシアチブにより、組織的にエキュメニズムが唱えられるようになる。特に第2次世界大戦後、この運動の具体化としてジュネーブに本部を置く世界教会協議会(WCC)が結成され、これには大部分のプロテスタント諸教会のほか東方正教会、非カルケドン派東方諸教会の一部も加わり、エキュメニズム推進の最有力機関となった¹⁶⁾。

一方、このエキュメニズムは、ロシア正教会においては一意的に理解されていない。

ロシア正教会には、「正教エキュメニズム」と呼ばれる正教を中心に据えた独自のエキュメニズムがあり、種々の教会が互いに寄り集う上述のエキュメニズムと区別する。そもそも正教会には、教会分裂以前の原始キリスト教団がもっていた真にして聖なる教会の本質を受け継いでいるのは正教だけであるという教会正統性論があり、自己の正統性＝全世界性を主張する。そしてこの論理をもとに正教会は、正教を全世界に普遍させることこそ真のエキュメニズムであり、分離した各教会が正教会を中心に寄り集まり、正教信仰に依拠した教会の統一を目指さなければならないと訴える。正教会は、プロテスタントを中心とする現代のエキュメニズムを「新エキュメニズム」あるいは「ジュネーブのエキュメニズム」と呼び、彼らが異教（非キリスト教系の信仰）も含めた種々の教会の統一を目指している点、またその統一がまったく信仰に根ざしていない機械的なものである点において批判する。たとえば正教会は、「新エキュメニズム」推進の活動母体であるWCCの会議においては、もっぱら人種差別や信教の権利の抑圧といった社会的側面の問題にのみ目が向けられ、肝心の信仰そのものについてはまったくと言ってよいほど協議がなされないことをあげる。

¹⁵⁾ 前掲書、223-225頁

¹⁶⁾ 『世界宗教大事典』（平凡社）460頁を参照。

たしかに、ロシア正教会のモスクワ総主教庁は、1961年にWCCのメンバーに加わりプロテスタントを中心とするエキュメニカル運動に同調することとなったが、しかしそれは当時の正教会上層部の外交的な動きであって、実際には正教会独自のエキュメニズムが教会内に（特に民族主義的色合いの強い在外ロシア教会内では）広く浸透していると考ええる。ちなみに、最近、ロシア国内で、現代のエキュメニズムを激しく非難する出版物が相次いで刊行されたことや、93年4月に、ロシア正教会の総主教アレクセイ2世が政府に対して、ロシアにおける外国宗教の宣教活動の規制を要請したことなどは、示唆に富んだ出来事であろう。

4 メーニのエキュメニズムの特質

アレクサンドル・メーニはキリスト教徒の分裂を、イエス・キリストの意志にそぐわぬ行為として否定した。キリストの神性に対して同じ信仰をもつ人々の分裂は、彼には我慢のならないことであった。特に、文化や民族性からくる各教会間の儀式の相違を目の当たりにして、いたるところで神を冒瀆する偽りの儀式が行われていると嘆いた。彼は、「神や人々への愛と比較して、宗教儀式の型式は二義的なものである……キリスト教は教会の民族性を、人間の精神とキリストの秘跡の具体的で個別的な受肉として尊重する。しかしそれによって教会の全世界的・全人類的性格が覆いつくされるわけではない」¹⁷⁾と言っている。

Е・ラシコフスキーは、メーニの世界観について、「その本質を、キリスト中心のダイナミックな形而上学として、また、聖書、教会伝説、何世紀にもわたる哲学および科学思想史の資料の総括を論拠とした形而上学として定義することができる」¹⁸⁾と指摘している。メーニはキリストを、自然、社会、精神の3つの世界の相対的な自立と相互連関における実践上ならびに理念上の中心、つまり人間の個人また集団的な精神生活の中心と考えた¹⁹⁾。

キリスト教の分裂に深く悲しみながらアレクサンドル・メーニは述べている。

「神に率直で、真に精神的なものと二義的なものを混同してはならない。器はさまざまでも神は一つなのだから。種々の文化や儀式は器となることはできるけれども、キリストは『私はアルファであり、オメガである』と言っている。そし

¹⁷⁾Мень А.(1991), там же.

¹⁸⁾Рашковский Е., "Забытые тезисы: из наследия о.Александра Меня", Асфепох Сборник памяти о. Александра Меня, Москва, 1991, стр.204.

¹⁹⁾Там же, стр.204-205.

てどんな場合でもこの言葉を放棄することはできない」²⁰⁾と。このようなキリスト中心主義が、メーニのすべての活動を規定していた。

メーニはキリスト教の中に包括される2つの面を見だし、それを統一することにキリスト教の本質があると考えた。2つの面とは、彼の表現によれば“上部と下部”、つまり神性と人性であり、それらを結びあわせるところにキリスト教の真実があると言う²¹⁾。キリスト教は、信仰によって真実を追い求めると同時に世界（社会）に開かれていなければならないということである。メーニによれば、福音書の根幹に流れる偉大な真実とは、“内的営み”と“外的営み”、“精神生活”と“社会への奉仕”の弁証法にあり、この真実は、社会生活における大きなエネルギーになるであろうと言う²²⁾。近づきつつある黙示録的な社会、エコロジーの危機を鋭敏に感じとったメーニは、すべての教会は互いに二義的なドグマや文化の相違を克服し、世界に開かれなければならないと考えた。その時にのみ、教会は、キリストによって与えられた人類救済の可能性を保持し得ると言うのである²³⁾。

メーニは未来の世界教会の在り方を次のように考えた。それは、福音書に従順で、愛と神への奉仕の精神に満たされた教会の多くが、1つの組織にまとめられることなく、自由に全世界に散らばっている状態である。メーニが理想としたこのエキュメニズムのモデルにおいて、「ジュネーブのエキュメニズム」との共通性、また差異を引き出すことが可能である。互いの共通性は、社会への開かれの原則であり、この根本的な問題においてメーニのエキュメニズムは、信仰のみに価値をおく傾向が強い「正教エキュメニズム」とは激しく対立すると言えるだろう。また差異は、未来の世界教会の特質とそこへ至るまでのプロセスにある。メーニは未来の教会を、まず第一に福音書に従順な教会でなければならないと考えた。しかし「ジュネーブのエキュメニズム」の同調者は未来の教会を、信仰における混合的性格を帯びたものとみなし、現実化のためにはドグマやカノンの修正も厭わないと主張するのである。

メーニは自己のエキュメニズムを、“下部からのエキュメニズム”あるいは“ベルソナリズムのエキュメニズム”²⁴⁾と呼び、個に最大の価値をおく人格主義的な

²⁰⁾Еремий А., там же, стр.178.

²¹⁾Мень А., “Два понимания христианства”, Русская мысль, 4 сентября 1992.

²²⁾Там же.

²³⁾Еремий А., там же, стр.181.

²⁴⁾Василенко Л. И.(1991), там же, стр.173.

精神を通してこの思想を現実化することを考えた。この点に彼のエキュメニズムの特質および本質がある。彼は自己が理想としたその人格主義的エキュメニズムの形成において、古代や中世の文化とは質的に異なった新しく生成されつつあるキリスト教文化を展望するのである。

5 おわりに

以上、メーニのエキュメニズムの特徴について若干の紹介を試みた。彼が民族主義的思潮の優勢なロシア正教会の内部にあって独特の立場に立っていたことは十分理解される。ベレストロイカ以降の西側との文化的、社会的交流の活発化と市場経済への移行にともなって社会的弱者の救済が大きな問題となっているが、そうした状況のもとで彼の生き方が、単なる宗教問題にとどまらず、社会的に大きな関心を引いているであろうことは想像に難くない。教会一致の問題は、ロシアの伝統ともいえる西欧主義対スラブ主義の対立とも無関係ではないと思われるが、こうした問題については別の機会に検討してみたい。

参考文献

- Мень А., "Письмо к Е. Н.", Асқіпox Сборник памяти о. Александра Меня, Москва, 1991.
- Мень А., "Благая весть", Знамя, №8, 1992.
- "Список опубликованных работ протоиерея о. Александра Меня 1959-1991", Асқіпox Сборник памяти о. Александра Меня, Москва, 1991.
- Крейнина-Мень Е., Крейнина Ю., "Отец Александр Мень", Русская мысль, 13 сентября 1991.
- Зелинский В., "Дабы уверовал мир", Русская мысль, 13 сентября 1991.
- Василенко Л. И., "Вокруг имени отца Александра Меня", Русская мысль, 21 августа 1992.
- Аверинцев С., "Миссионер для племени интеллигентов", И было утро, Москва, 1992.

Архим Серафим, А., Архим Сергей Я., Почему православному христианину нельзя быть экуменистом, СПб., 1992.

Переплекина Л., “Экуменизм - путь, ведущий в погибель”, СПб, 1992.

Игумен Иннокентий, “Пальцем в небо”, Независимая газета, 10 марта 1993.